

South-eastern Arabia in the Historical Sources 1

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1577

文献史料に見る南東アラビア(1)

ササン朝支配期以前

South-eastern Arabia in the Historical Sources(1) Before the Sasanian Rule

部 勇 造
Yuzou Shitomi

I. はじめに

ペルシア湾(アラビア湾)は、ハラッパー文明とメソポタミア文明の交流に見られるように、インドとイラクを結ぶ海上ルートとして古くから機能しただけでなく、西の紅海とともに、インド洋世界と地中海世界を結ぶルートとして、東西交流史上極めて大きな役割を果たしてきた。この両湾に陸上の隊商路(イエメンとシリアを結ぶいわゆる「香料の道」)を加えた3本のルートは、交易ルートとしては競合関係にあったと言われることが多いが、実情はそれほど単純ではなく、むしろ相互補完的な関係にあった時期もある。

ところで、これら3ルートの走る地域の歴史にとって最大の事件と言え、異論なく7世紀のイスラームの勃興と拡大であろう。そして通説では、イスラーム誕生の地メッカの興隆と、3本の交易ルートの盛衰との間に、密接な因果関係があると主張されてきた。ところがイスラーム勃興前後の時代については、実はいずれのルートについても、それぞれの港市/宿駅の位置や実態を含めて、不明な点が少なくない。

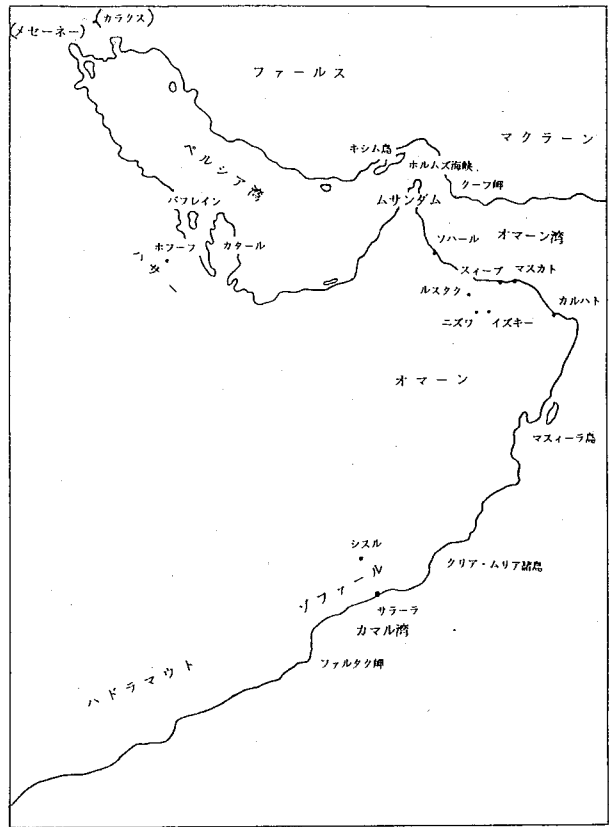
そこで筆者は、金沢大学考古学研究室の佐々木達夫教授と協力して、「イスラーム勃興期前後のペルシア湾と紅海——沿岸の社会・文化の実態に関する比較研究——」というテーマで共同研究を行うことを計画した。ペルシア湾と紅海の港湾都市遺跡で、発掘を含む考古学調査を実施して、その結果を比較し、さらに当時の事情を伝える文献史料と併せて検討することによって、上記の不明な点の多くを解明することを目的としている。これまで主に文献学的方法で、古代のインド洋交易と環紅海地域の歴史研究を行ってきた筆者と、考古学的方法によって中世のペルシア湾沿岸の遺跡調査を続けてきた佐々木が、相互の知見を交換するだけでなく、現地調査を共同して行うことの意義は大きく、具体的な成果が期待できる。

以下の小論は、この共同研究の、筆者の分担部分の成果の一部で、文献史料に見える前イスラーム期、特にキリスト紀元前後から2世紀間の、南東アラビア(現在のアラブ首長国連邦とオマーン)関連の記事をまとめたものである。これは、ペルシア湾ではイラン系のパルティア(アルシャク朝)の勢力が強かった時期に当たっている。この後のササン朝支配期までを含め、前イスラーム期を一括して本稿で扱うことも考えないではなかったが、史料的に2世紀までは古典語文献が中心なのに対して、それ以降はアラビア語文献が主になるという違いがあるので、このような分け方をした。ササン朝支配期以降の様子を伝える記事の整理には、次回を期したい。

なおこの研究は、財団法人鹿島学術振興財団の助成金を受けて行われた。

II. 紀元前の時代

極めておおまかにこの章と次の章を分けた。ペルシア湾の情勢から言えば、キリスト紀元の前と後で時代を分ける必然性はないし、おそらく南東アラビアについてもそうであろう。史料的にも、前1世紀から後2世紀あたりにかけてのものが、一つのグループをなしている。にもかかわらずこのような章分けをしたのは、あくまでも便宜上の措置であって、以下、本章の中でも必要に応じて紀元後の史料も使うし、また紀元前の事象でありながら、次章に回されたものもある。いずれにせよ、本稿の趣旨に従い、この時代については簡単に触れるに止めたい。より詳しくは、ポッツの前イスラーム期ペルシア湾史の概説書の該当箇所 [Potts 1990. I :133-149, 258-259, 393-400] を参照されたい。これは湾岸各地の遺跡の解説が特に詳しい書であるが、メソポタミアの粘土板文書や刻文、貨幣の銘文から始めて、ギリシア・ラテンの古典語文献に至るまでの、広い意味での文献史料に関する先行研究の要約にもすぐれている。



地図1 南東アラビア

II.1. マガン/マッカン、カデー、マカー

シュメールから古巴ビロニア時代までの文書の中で、特に銅の産地として言及されている「マガン Magan」とか「マッカン Makkan」とかいう地名が、オマーン半島とその対岸のイラン南東部を、また「メルッハ Meluhha」がインダス下流域を中心とするハラッパー文明の栄えた地を指していたということは、おおむね認めてよいのではなかろうか。

ところが紀元前1千年紀のアッシリア新王国時代になると、これらの地名は一転してエジプトやヌビア方面を指すようになったようである。その理由については、かつてこれらの名で呼ばれていた地方からもたらされた物産を、この時代にはエジプトやヌビアが供給するようになったので、このような誤用が生じたとするランズベルガーの有名な説 [Landsberger 1924: 217, n.2] があるが、必ずしも定説とはなっていない。一方、従来「マガン/マッカン」と呼ばれていた地域は「カデー Qadê」と呼ばれ、それは新バビロニア時代を経て、次のアケメネス朝ペルシアの時代まで続いた。もっともアケメネス朝時代の刻文では、アッカド語で「カデー」と記されている地名が、古ペルシア語では「マカー Makâ」となっていて、こちらは明らかに古い地名を保持しているのが興味深い。

ニネヴェのイシュタル神殿から出土したアッシュールバニパル王の前640年頃の碑文(いわゆるイシュタル・スラブ) [Thompson & Mallowan 1933:80-98] の132-133行に、イスケー (Zadok 1981:54 の読みによれば Is/s/z-ki/qi-e) 市に住むカデー国の王パデー (Pa-de-e) からの使節が、6カ月もかけて来貢したという記事がある。ポッツは、この王名が必ずしもアラビア系とは言えぬまでも西セム系であるというザドクの言 [Ibid.] と、後世のプリニウス著『博物誌』第6巻32章149節の、オマーン半島辺りにカダエイ Cadaei

族が居住するという記事をもとに、このカデー国がイラン側ではなくオマーン側にあったと解し、さらにイスケーをオマーンの都市イズキー Izkiに同定している[Potts 1985:82-83]。イズキーはアフダル山地の南麓に位置し、ニズワの東方にある内陸のオアシス都市で、土地の伝説によればオマーンで最も古い集落であるという[Wilkinson 1983:189]。ここを中心に前7世紀に土着の王国が存在したというのが事実なら、アラビア古代史を専攻する者にとっては非常に興味深い。と言うのも、現在のイエメンにあたる南西アラビアでも、実はこの前後の時代に王国が成立したという説が有力で、前685年にアッシリア王に朝貢したと記録されているサバ王カリビイルは、南アラビアのサバ国の王ではないかと言われている。アラビア半島南部の東西で、ほぼ同時期に王国が形成されたというのは、果たして単なる偶然であろうか。

II.2. マケタ岬／ムサンダム

古ペルシア語のマカーが、ホルムズ海峡のアラビア側までも含んでいたことは、次の例を見てもほぼ間違いないようである。この王朝滅亡後の史料になるが、アッリアノス著『インド誌』第32章7節に、インド遠征より戻るアレクサンドロス軍のうち、海路をとって沿岸航路を西進してきたネアルコス艦隊が、ホルムズ海峡に向け進路を北に変える際、アラビアの一部であるマケタ Maketa と呼ばれる大きな岬を望見したという記事がある。またストラボン著『地誌』第16巻3章(ここは前3世紀のエラトステネスを典拠としている)の第2節と4節には、アラビアのマカイ Makai族の地にホルムズ海峡に突き出した岬のあることが記されている。問題の岬は言うまでもなくムサンダム半島、またマケタとマカイはいずれもマカーの派生語と考えられる。アケメネス朝時代を通じて、南東アラビアの少なくとも一部は、この名で呼ばれていたのである。

ところで、このマケタ岬に関連して、オマーン半島の歴史的役割を考える上で見逃せない逸話をアッリアノスが伝えているので、少し長くなるがそれを紹介しておこう。『インド誌』第32章9節から12節にかけて次のように記されている。翻訳は[大牟田 1996]による。

その[対岸の]岬が望見されたときオネシクリトスは、そちらに向かって船を進めるよう、[乗組員たちに]指示した。湾内深く漕ぎ進んで苦難を嘗めることがないようにというのであった。ところがネアルコスはこれに答えて、艦隊がアレクサンドロスによって派遣されたのはいったい何のためなのか弁えていないとすれば、オネシクリトスは馬鹿だと言った。アレクサンドロスとしては何も、その軍勢すべてを徒歩行軍では無事に連れもどれないからという理由で、艦隊を送り出したわけではない。彼の意図では、艦隊が通過する沿岸各地の状況を、泊地や群島の島々をも併せ仔細に調査し、およそ湾入しているようなところはそこを一周させ、海沿いの町々にもことごとく当たり、どこの土地に果物がよく実っているか、どこが無人の荒れ地になっているかなどを調べさせようとして、この艦隊を送り出したのだ、われわれにとってもこの苦難の航海が、もういよいよ終わろうというときになってしかも、とりわけ沿岸航行に必要な不可欠な物資にも、やっと不足不自由がなくなった今になって、この大事業をぶちこわしにしてしまうというのがごときことは断じてあつてはならぬ、それに懸念されるのは、岬が南に向かって広がっているところから、われわれとしては彼の地で荒れた、水もない灼熱の土地に行き当たることになるのではないかということだ。

この話は同じアッリアノス著『アレクサンドロス東征記(アナバシス)』第7巻20章9～10節にも収められている。その最初の部分を引用すると、

ところでネアルコス[艦隊]の乗組員たちもインドからの航海途上で、ペルシア湾に向け進

路を変えるに先立って、その岬が程遠からぬあたりにせり出しているのを認め、すんでのところ対岸のその方へ船を渡すところだった。艦隊の舵取り役だったオネシクリトスもそうするのがよいと考えたがネアルコスは、ペルシア湾の周航を達成してアレクサンドロスから託された任務を、はやく王に報告できるようにと、自分がみずからそのことを禁じたのだと述べている。

この後、ネアルコスの反対した理由が続くが、それは省略する。

オネシクリトスが艦隊の進路変更を主張した意図と彼がとろうとした航路に関し、大牟田は註釈の中で四つの説を紹介した上で、いずれも矛盾点が伴うのを免れず実際にはよく分からないと述べている[大牟田 1996. II :2234-2235]。しかし筆者には、オネシクリトスや船員達のとった行動は十分理解できる。彼らは当時インドからペルシア湾に向かう船が通常とっていた航路を、そのままどろうとしたに過ぎないのではなかろうか。地図を一見すれば明らかなように、インドの港を出て西進してきた船は、ホルムズ海峡を抜けてペルシア湾に入ろうとする場合、クーフ岬を回り針路を北に変えてイラン海岸に沿って進むより、アラビア側のムサンダム半島までそのまま西に進み、後はこの半島の海岸伝いに航行した方が、走行距離は短くて済む。また、人力や風力に頼って航行する船にとり、潮流、風向、それに海岸線の複雑なホルムズ海峡を抜けるよりも、ムサンダム半島の適当な入江に入って上陸し、山間の峠越えの道を抜けて岬の反対側の海岸に出た後、改めて海路目的地を目指す方がはるかに容易であったはずである。事実ムサンダム半島には、そのような東西海岸を結ぶ山越えのルートが何本も知られている。ネアルコスの一行の場合、たとえムサンダム側に渡ったところで、そこで船を降りることができたとは思えないが、アッリアノスの伝えるこの逸話は、当時オマーン湾とペルシア湾を結ぶルートがどこを通過していたかを示唆する、文献上おそらく最古の史料として貴重である。

II.3. アケメネス朝の支配とアズド族の移住

さて既に述べたように、ホルムズ海峡を挟む南北の両地方は、古くから一体と理解されていた。その背景には、現実に海峡を越えて人と文物が往来した歴史があったと考えられる。では政治的にはとなると、話はそう簡単でない。たとえばアケメネス朝の支配がアラビア半島にまで及んでいたか否かとなると、「マカー州」という行政単位があったことは間違いないが、これがイランのマクラーン地方だけでなくオマーン半島までを含んでいたかどうかは確言できない。しかしポッツはこの点について肯定的である[Potts 1985:83-85; 1990. I :394-400]。彼が挙げる複数の根拠のうち、ここでは18世紀前半に著された *Kashf al-Gumma* というオマーンの年代記の中の記事に触れておきたい。因みにこの書は、その一部だけが英訳・刊行されている[Ross 1874]。

現在のオマーン人の中核を成すアズド族は、彼らの祖先は前イスラーム期に波状的にイエメン方面から移住してきたと言い伝えている。問題の年代記の第4章に記されているのは、その移住第1陣についての伝説である。それによると、マーリク Mâlik b. Fahm に率いられた一族は、サラート(一般にはイエメンの分水嶺の西側地域を指す)を出た後ワーディー・ハドラマウト経由で東に進み、オマーン南東部のカルハト付近に達した。当時オマーンはダーラー王 Dârâ b. Dârâ b. Bahman 支配下のペルシア人によって占拠されていた。そこでマーリクはペルシア人に、彼らが暮らしていけるだけの土地の割譲を求めたが、拒否されたため戦いになり、最終的にはダーラーの派遣した援軍も撃破してペルシア人を駆逐し、この地に居を定めるに至ったという[Ibid.:112-118]。ポッツはダーラーをアケメネス朝最後の王ダリウス3世と解し、この記事のアケメネス朝のオマーン支配の典拠にする一方で、アズド族のオマーン移住は前4世紀より始まったと主張している[Potts 1990. I :398-400]。

一般にはこの伝説はアナクロニズムで、アズド族の先陣がオマーンに移住したのは1世紀か2世紀前半と言われている[Blau 1868:666; Ross 1874:184; Wilkinson 1972:71; 1983:186]。しかし彼らが伝説に基づいて移住の契機としているサバ王国のマーリブダムの決壊は、実は歴史上何度も起こっており(その度に補修が行われた)、しかも伝説が語るように住民に移住を余儀なくさせるほど破滅的なものではなかったことが、現在では碑文や遺跡の研究によって判明している。したがって、伝説上のダムの決壊の年代をもとにアズド族の移住の時期を推定する方法は最早無効である。実は筆者もアラブ人の移動の問題には関心があり研究を進めているが、目下のところ、アズド族のオマーン移住の時期・要因いずれについても答えが出せずにいる。

既述の事柄との関連で、最後にもう一つだけ言及しておきたいことがある。ストラボンの『地誌』第16巻3章7節には、ペルシア湾でネアルコスの一団の案内人を務めるオアラクタ Oarakta島(ホルムズ海峡のキシム島に比定される)の支配者マゼーネース Mazênês の名が出てくる。これをブラウは伝説上のアズド族のマーズィン Mâzin b. Azd に比定し[Blau 1873:321]、ポッツがこれを支持しているのは[Potts 1990. II:301-302]、アズド族のオマーン移住の開始を前4世紀とする彼の立場から当然のことと思える。Mâzin b. Azd とオマーンとの関係にはマイルズも言及している[Miles 1919. I :4-5,8]。Mâzin という族名はアラビア半島の各所に広く分布していて、しかも互いに系譜上のつながりもないところから、レヴィ・デラ・ヴィダは、これが元来は「去る」という意味の動詞 mazana からの派生語(能動分詞)で、「移住者」という意味ではなかったかと推測している[Levi Della Vida 1991]。

III. 1～2世紀

この時期、ローマ帝国の経済的繁栄を背景として、エジプトを根拠地とするギリシア系の船員や商人がインド洋に著しく進出した。進出先に彼らの居留地が設けられたことも、よく知られている。その結果、紅海とインド洋沿岸の状況は、かなり詳しく古典語文献に記されて残っているが、それに比べるとペルシア湾沿岸はやや寂しい。おそらくパルティア・ササン朝期には、西側の商船が直接ペルシア湾内に入って取引することが、ほとんどなかった故であろうと一般には考えられている。

この時期の古典語文献の中で、歴史地理的情報の基本史料となるのは、成立年代順にストラボンの『地誌』、作者不詳の『エリュトラ海案内記』、プリニウスの『博物誌』、それに2世紀のプトレマイオス著『地理学』である。このうち『地誌』は、既に引いたことを除けば、あとはペルシア湾内の真珠採取に言及する程度で、南東アラビアに関する情報には乏しい。『博物誌』の成立は1世紀後半で、『エリュトラ海案内記』のそれの方が若干早い。ペルシア湾沿岸に関するプリニウスの主たる情報源は、下記の引用文からも明らかなように、キリスト紀元をまたいで北アフリカのヌミディア、次いでモーリタニアの王に任じられたユバ2世の、現在では散逸した著書であった。そしてユバ2世自身も先人の諸書をもとに著作を行ったと言われているので、結局のところ『博物誌』のペルシア湾岸の記事は、おおむねヘレニズム時代のギリシア語諸文献に収められた情報に基づいていると考えられる。したがって前の章に入れた方が適当とも言えるが、中にプリニウスの時代のオマーン関係の記事を含んでいるので、本章で扱うことにした。以下ではまずこちらの記事から見ていくことにしよう。

III.1. プリニウス『博物誌』の記事

『博物誌』では第6巻32章147節からペルシア湾のアラビア側の説明が北から順に始まり、148節の末尾には現在のカタールに比定されるカタッレイ Catharrei という遊牧民の名が出てくる。以下に翻訳し

て引用するのは、南東アラビアの記事が始まる149節からで、固有名詞は原則として片仮名に直さずローマ字のまま表記する。

(149)ユバによれば、そちら側(=アラビア側)のその先の航路は、岩礁が多いためにまだ調査されていないという。彼は Omani(オマナ人)の町 Batrasavave/Batrasabbe、昔の著作家達がカルマニアの有名な港と見なしたオマナ Omana、また我らの商人達が今ではペルシア湾で最も船の集まる港だと言っている Homna と Attana には言及していない。Canis(=Cynos)河の後には、ユバによれば、焼けたように見える山、Epimaranitae族、それから魚食人、無人島、Bathymi族、Eblythaea山脈、Omoemus島、Mochorbae港、Etaxalos、Inchobrichaeの両島、Cadaei族、(150)多くの名のない島々、よく知られている Isura、Rhinneaの両島、その隣の未知の文字で銘文の記された数本の石柱がある島……(中略)……(152)Macae族、その領地にある岬は50マイル離れたカルマニアに突き出している。注目に値する事件がそこで起こったと言われている。即ちアンティオコス王によってメセーネーの長官に任じられたヌメニウスが、ここでペルシア人との海戦に勝利し、潮が引いた後には騎兵を率いて再度勝利を収めた。そしてまさにその場所に、ジュピターとネプチューンに対して一対の戦勝記念碑を立てた。

省略した150節の途中から152節の冒頭部までには、紅海沿岸とインド洋のアフリカ岸の記事が混入していると解されている。上記4書のうち、現地体験者によって著された『エリュトラー海案内記』を除く他の3書は、いずれも言わば書斎の学者が文献や伝聞をもとに執筆したものである。常にこの種の問題がつきまとう。さらに4書に共通の問題として、筆写が繰り返される過程で後世の情報が混入した可能性も強い。特にプトレマイオスの『地理学』は、この点を強く指摘されている。

ところで、152節の引用部の最初の「Macae族、その領地にある岬は」の箇所は、原文では "drimatinaumachaeorum/naumache horum promunturium" となっているところを "drimatina, Macae: horum promunturium" と改めたものである。この箇所についての解釈は必ずしも一様でないが [Potts 1990. II :14]、こう改めるのが一番いいように思える。言及されている岬は言うまでもなくムサンダムで、マカエ族は先に触れたストラボン『地誌』に出てくるマカイ族と同じである。なお drimatinaは前の文(省略)に属する。

ヘレニズム期にセレウコス朝がペルシア湾に勢力を有していた時代に、メセーネーの長官がムサンダム半島でペルシア人と戦ったという、南東アラビア史上見過ごせないこの伝承についても解釈は分かれている [Ibid.:12-14]。即ち、問題のアンティオコス王には、前3世紀前半から次の世紀の後半にかけて在位したアンティオコス1世、3世、4世、7世の4人の候補があり、また文中「ペルシア人」と呼ばれているのが、新興のパルティアなのか、それとも前代よりここに居を定めていたペルシア人勢力なのか、そしてヌメニウスの遠征の目的は何であったのか、等々の論点がある。因みにメセーネーは、チグリス・ユーフラテスの河口部を中心とするイラク最南部の地方で、ここにアレクサンドロス大王が建設した都市が、後に発展してカラクス市となり、特にパルティア期にペルシア湾(そしてその先のインド洋)とシリア(そしてその先の地中海)とを結ぶ交易のセンターとして大いに栄えた。パルティアの宗主権を認めつつ、メセーネーにカラクスを首府として成立した半独立の国家はカラケーネーと呼ばれた。

この事件の起きた年代と「ペルシア人」を特定することは出来ぬにせよ、アケメネス朝滅亡に続く時代においても、南東アラビアの一角がイラン側の勢力の強い影響下に置かれていたことは、間違いなく言えそうである。また彼らに対して、おそらくセレウコス朝の支配者の意を体してのことであろうが、メセーネーから遠征が行われたのは、先にネアルコス艦隊の逸話に触れて述べたように、ムサンダム半島がインドとペルシア湾を結ぶ海上ルートの要になっていたことと、このルートを通じて行われる交易

こそが、いま上で述べたようにメセーネーにとって生命線とも言うべき重要性を持っていたことからすれば、当然の行動であったと言える。

『博物誌』の上の引用文に現れる他の地名と族名のうち、オマナ関係のものは第3節で改めて取り上げるが、その他の考証は他書[Blau 1873; Sprenger 1875; Miles 1878; Glaser 1890; Wissmann 1958; Potts 1990. II]に譲り、本稿では省略する。

III. 2. イシドロス『パルティア駅亭誌』断簡

メセーネーとムサンダムとの関係を示唆する別の史料を挙げておこう。それはメセーネーの中心カラクス市のイシドロスという人物が、キリスト紀元の前後に著した『パルティア駅亭誌』と呼ばれる書である。ここにはユーフラテス上流のシリアのゼウグマから、アラコシアの首府アレクサンドロポリス(現在のアフガニスタンのカンダハール)までの、パルティアの幹線道路の旅程と宿駅がごく簡略に記述されているが、別にその断簡が偽ルキアノスの書に引用されて残っており、そこに「カラクスのイシドロスの言によれば、彼の時代に香料の郷のオマナ人の王であったゴアイソス Goaisosが、115年間生きた後に病没した」と記されている[Schoff 1914:14-15]。これが古典語文献における「オマナ」という語の初出例ではないかと思う。その後この語は他のいくつかの文献にも登場し、それぞれどこを指しているかで議論が割れているが、この場合は漠然とオマーン半島を指していると解してよいのではあるまいか。

「香料の郷」とあるのは、ここを経由して香料がカラクスに輸入されるからそう呼んだままで、乳香産地のゾファール地方を特に指している考える必要はない。ただ『エリュトラ海案内記』の第32節で、ゾファール地方に湾入する海域が「オマナ」湾と呼ばれているのを見ると、あるいはこのあたりまでを広く含めてオマナと呼ぶ習わしが当時すでにあったのかも知れない。ポッツは、カラクス出身の著者がこの書の主題からはずれたオマーンあたりに態々言及している点に注目し、両地の深い関係がここからも窺えると主張している[Potts 1996:276]。この問題については後で再び触れる。

III. 3. 『エリュトラ海案内記』の記事：オマナについて

順序は逆になってしまったが、引用文の第149節に戻ると、そこにユバによっては記されていない、プリニウスの時代のオマーン関係の記事がある。「オマナ」及びそれから派生した地名／族名は『博物誌』のこの箇所他に、『エリュトラ海案内記』やプトレマイオスの『地理学』の中でも言及され、貨幣の銘文にも現れる。プリニウスが「昔の作家達がカルマニアの有名な港と見なしたオマナ」と言っているので、この地名はヘレニズム期には西側にも伝わっていたのであろうが、現存の史料にこの名が初めて現れるのは、上に引いた『パルティア駅亭誌』の記事が最初である。プリニウスの言から、この名で呼ばれる重要な港市の位置について、それがイラン側なのかアラビア側なのかを巡って、西側の作家や学者達の間で意見の対立があったことが窺える。

しかしこの点については、実は今の学者の場合も同様で、特に『エリュトラ案内記』の中のオマナ／オンマナの位置を巡って異論がある。この書では複数の箇所でこの地名が言及されているので、まずそれを以下に挙げる。この地名の出でこない第35節も訳出するのは、次の節を理解するうえで不可欠と思われるからである。翻訳は[薮 1997]による。

第27節末尾：……(前略)……(南西アラビアのハドラマウト王国の港カネーは)海を越えて、バリュガザ、スキュティアー、オマナ、近隣のペルシスといった商業地と取引を行っている。

第32節冒頭：スアグロスの次にすぐ続いて湾があり、陸地に深く入り込んでいる。オマナで、その横断は600スタディオンである。……(後略)……

第35節全文：カライオス諸島の先端部といわゆるカロン山の辺り（まで来ると）、間もなくペルシア（湾）の入口となり、真珠貝の潜水採取が極めて盛んである。この入口の左手には [ア]サボー[ン] という非常に高い山があり、右手には、セミラミス(山) と呼ばれる別の丸くて高い山が、真向かいに見通せる。両者の間の、この入口の横断航海はおよそ600スタディオンである。そこから極めて大きく広いペルシア湾が、内奥の地へと広がっている。その最奥部にアポロゴスと呼ばれる法定の商業地があって、パシヌー・カラクスとユーフラテス河の近くに位置している。

第36節全文：この湾（ペルシア湾）の口を沿岸航行して6日航程の後に、オンマナ Ommana と呼ばれるペルシスの別の商業地がある。ここへは通常バリュガザからペルシスのこれら両商業地に向けて、銅、チーク材、梁材、桁材、シツソ材、黒檀を積んだ大型の船が仕立てられる。オマナへはまたカネーから乳香が、オマナからアラビアへはマダラテと呼ばれるこの土地独特の縫合小舟が（それぞれ送られる）。両商業地からバリュガザやアラビアへは、多量ではあるがインドのに比べて質が劣る真珠、パープル染めの品、この土地風の衣服、葡萄酒、多量の棗椰子、金、奴隷がもたらされる。

第37節冒頭：オマナの（属している）地方の次には同じように、別の王国のパルシダイの地方とテラブドイという湾が広がり、……（後略）……

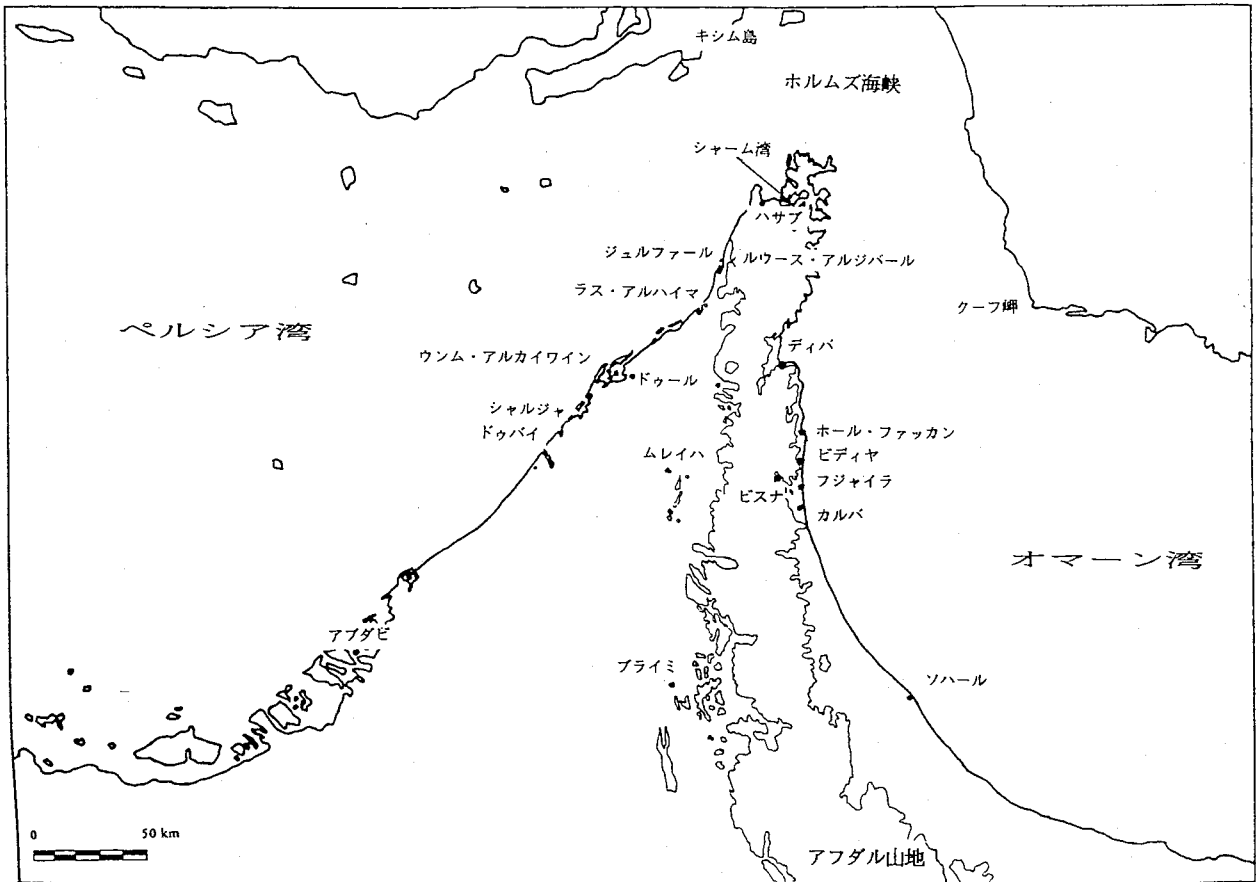
引用文中の「バリュガザ」は、インドのキャンベイ湾に注ぐナルマダ河の河口近くにある現在のバローチ/ブローチで、当時はインド西岸最大の港市として殷賑を極めていた。「スキュティアー」はインダス流域のインド北西部。「ペルシス」については、これをパルティアと見る説と、その宗主権下にイランのファールス地方を中心に存在した、カラケーネーと同じく半独立の地方政権と見る説とがある。「スアグロス」は現在のファルタク岬。「別の王国」の解釈は「ペルシス」のそれ次第。後者をパルティアと解すれば前者はファールス土着の地方政権ということになるが、いやこの政権こそが「ペルシス」だと主張する者にとっては、「別の王国」はそのさらに東方にあった別勢力でなければならない。最後の「パルシダイの地方」は、ここではファールスだけでなく、その南のカルマニア地方まで含んでいるというのが一般の解釈である。「テラブドイ湾」はマクラーン海岸の一部なのであろうが未詳である。

上に引いた文中で言及されている土地のうち、『案内記』の著者が自ら訪れたことがあるのはおそらくカネーくらいで、そこから先のインダス河口に至るまでの地方、特にペルシア湾の沿岸に関する記事は、すべて伝聞に拠っているというのが定説である。オマナ/オンマナを検討するに際しても、そのことを念頭に置いておく必要がある。

第27節と36節の「オマナ」が同一であることは、まず間違いない。ファルタク岬に続く地方は乳香産地として名高いゾファールで、その沖合の現在のカルム湾が第32節では「オマナ」と呼ばれている。この地方は現在でこそオマーン領となっているが、歴史的にはイエメンとオマーンの係争の地であった。

『案内記』の時代にはハドラマウト王がここを領有し、乳香は原則として一旦カネーに運ばれた後に輸出された。それで筆者などは、この地とイエメンとの関係の方を重視しがちなのであるが、たとえ湾の名称としてであれ、この時期すでに「オマナ」という地名がこの地に及んでいたという事実は、乳香のペルシア湾方面への搬路の問題とも絡んで、オマーンとゾファールとの関係の再考を促している。

さて、第36節の「オンマナ/オマナ」がイラン側にあるのではないかとされるのは、一つには直前の第35節にペルシア湾頭のアポロゴスが出てくるからである。『案内記』の記述はエジプトの港からインドへ向けて、西から東へと進んでいくので、アポロゴスの次にはアラビアではなくイラン側の港市の説明が続くのが、然るべき順序と言える。また第37節も一見した限りでは、オマナの属す地方とパルシ



地図2 ムサンダム

ダイの地方が陸続きであるかのような印象を受ける。『案内記』だけを読んだのでは、こちらの説に分があると言ってもよいほどである。ところが先に見たように、それは間違いでオマナの町があるのはペルシア湾のアラビア側だという趣旨のことを、プリニウスが態々注記しているのである。因みにプトレマイオスの『地理学』には、オマニタイ *Omanitai* 族とオマノン *Omanon* 交易地の名が見えるが、いずれも南東アラビアの内陸部に置かれている(詳細後述)。そこで、オマナという古代の商業地はアラビア側にあったのか、それともイラン側にあったのか、またペルシア湾内か外側(オマーン湾側)なのかを巡って、19世紀の初めより様々な説が提出された。諸説の概要はポッツの書の中で紹介・批判されている [Potts 1990. II :306-310]。

引用した諸史料からは、「オマナ」という商業地を中核とする広い地域と、さらにはそこに住む人々がこの同じ名で呼ばれていたことが判明する。このこと自体は他にも例のあることで、別に珍しい現象ではない。この町がアラビア側にあるのかイラン側なのかを巡って、古代の学者や作家の意見が混乱した原因は、パルティア・ササン朝期にはこの地域の確かな情報が入手しにくかったという事情の他に、おそらくホルムズ海峡の両側の地方が、古来しばしば一体として把握され同一の名で呼ばれたという歴史に求められるのではなかろうか。『案内記』の書かれた1世紀中頃においても、同書によればゾファール地方まではハドラマウト王国領であったが、現在のクリア・ムリア諸島を過ぎた辺りから先は「最早同じ王国ではなく、既にペルシスの(領域)」(第33節)というような状況であった。即ちオマーン半島はイラン側の政権の影響下に置かれていた訳である。

細かな考証は省略し、ここではポッツとともにプリニウスの言に信を置き、商業地オマナはアラビア側にあったと解したい。問題になるアポロゴスとオンマナ/オマナの記述上の順序は、前者は第35節で

ペルシア湾が奥深く広がっていると述べられたついでに、最も奥にあるその名が挙げられたままで、沿岸の商業地の説明自体は、第36節で改めてペルシア湾のアラビア側から始められているという解釈が十分可能である。また第37節はよく読むと、むしろオマナ=アラビア説を支持している。何故なら、仮にこれがイラン側にあるとすると、ペルシア湾の余程北の方に位置するものでなければ、その地方の次にパルシダイの地方が続くというのはいないからである。

ではアラビア側の何処にオマナはあったのかとなると、ここから先は文献史料だけでは如何ともしがたく、現に存在が知られている遺跡や歴史の古い町が候補地として挙げられる。プトレマイオスが言及する内陸の商業地オマノン¹はさておいて、港市のオマナに焦点を絞ると、ムサンダム岬を境にして東側海岸(オマーン湾岸=バーティナ海岸)説と西側海岸(ペルシア湾岸)説に分かれる。前者の最有力候補地と目されているのがソハールで、港として好適な入江に恵まれていないにもかかわらず、ワーディーエを通じてオマーンの内陸部やペルシア湾岸と往来できることと、近くに鉱山があることが幸いして交易地として栄えた[Kervran 1984:290. Cf. Miles 1877:52]。イスラーム期の発展ぶりはよく知られていたが、近年の発掘調査によって町の基礎が据えられたのが前1世紀であることが判明した[Kervran & Hiebert 1991]。これはまさにインド洋交易の発展期に当たっており、この時期にこの港市の建設が行われたということ自体は、極めて重要かつ興味深い事実である。しかし先に見たように、おそらくヘレニズム期には既にその存在が地中海世界にまで知られていたと思われるオマナの候補地としては、これでソハールは失格と言えるのではないか。また『案内記』第36節の、ペルシア湾の口を6日間沿岸航行すると、そこにこの商業地があるという記述にも、ソハールは適合していると言ひ難い。

ペルシア湾側で近年最も注目されているのが、アラブ首長国連邦に属するウム・アルカイワイン Umm al-Qaiwain 首長国のドゥール al-Dûr/ ed-Dur 遺跡である。南東アラビアのペルシア湾岸の遺跡の中で、現在までのところヘレニズム期からローマ期へかけて(4世紀まで)の遺物が出土するのはここだけというので、特にポッツがここをオマナの最有力候補地と見なしている[Potts 1988:155; 1990. II :309-310]。現況では筆者もこの見解を認めるに吝かでない。かつてはこの比定に批判的であったサレも、その後これに同意している[Salles 1995: 133]。因みにドゥールの南東に位置し、かつてはワーディーエ・ルートで相互に連絡していたと思われる、内陸のムレイハ Mleiha の遺跡からも、地中海世界からの輸入品を含む同時代の遺物が多数出土している。さらには、このムレイハと峠越えのルートを通じて連絡している東のオマーン湾側のビディヤ Bidya や ビスナ Bithna にある遺跡の墓からも、ごく少数ではあるがやはり地中海産の遺物が発見されている。おそらく、ムレイハを経由して東岸の港と西岸のドゥールを結ぶルートが存在したのであろう。

『案内記』の記事については他にも重要な問題が多々あるが、その検討は別の機会に譲り、プリニウスのオマナの記事に再び話を戻して、この節の締め括りとしたい。彼がオマナ人の町と呼んでいる Batrasavave/Batrasabbe の解釈には、ポッツも紹介しているように[Ibid.:305-306] 諸説はあるのだが、どれとも決め難い。シュプレングラーは sabbe をマスカットの西のスイーブ Sib (現在は同名の国際空港がマスカットとの間にある) に比定し、batra を batn (アラビア語で窪地、谷)の間違いでなければ、火山地帯を意味する bathr であろうと言っている[Sprenger 1875:124]。これに対し、マイルズはこれを batha Sib 即ち「スイーブの河床」と解している[Miles 1878:164]。グラウザーはこの語の本来の形を Beyt Raşâba/Rasâfa と想定しているが、その位置についてはカタール半島の南東の方角と言うに止まっている[Glaser 1890:80]。最後にウィルキンソンはこれをラテン語の petra と Sabae の合成語と考えているのか、元来「サバ人達の岩/砦?」のような意味ではなかったかと推測し、近くの岩山の頂に土地の伝承でザッバー(パルミユラの女王ゼノビアのアラビア名)もしくはビルキース(サバ/シェバの女王のアラ

ビア名)に帰せられる中世の砦跡のある、ラス・アルハイマ Ras al-Khaima 首長国のジュルファール Julfār に比定している[Wilkinson 1964:341 and n.6]。サバの女王伝説がアラビア半島に流布するのは早くとも紀元後数世紀を経た後のことであるし、ジュルファールの砦跡がビルキースと結び付けられたのはさらに遅くイスラーム期になってからと考えられるが、ことによるとここには以前より「サバ」に近い地名があつて(サバ王国との関係の有無は別にして)、それが一方では『博物誌』に記されているような形で西方に伝わり、また一方では後に土地の伝承形成の一因となったのかもしれない。このような場合に限って、ウィルキンソン説もあながち荒唐無稽とは言えない。仮に商業地のオマナがドゥールの地にあつたのなら、そこからそれほど離れていないジュルファールにオマナ人の町があつてもおかしくない。

なお『博物誌』でオマナに続いて言及されている Homna と Attana は、一般に Omana と 第148節に出てくる Attene の繰り返しと解されている。

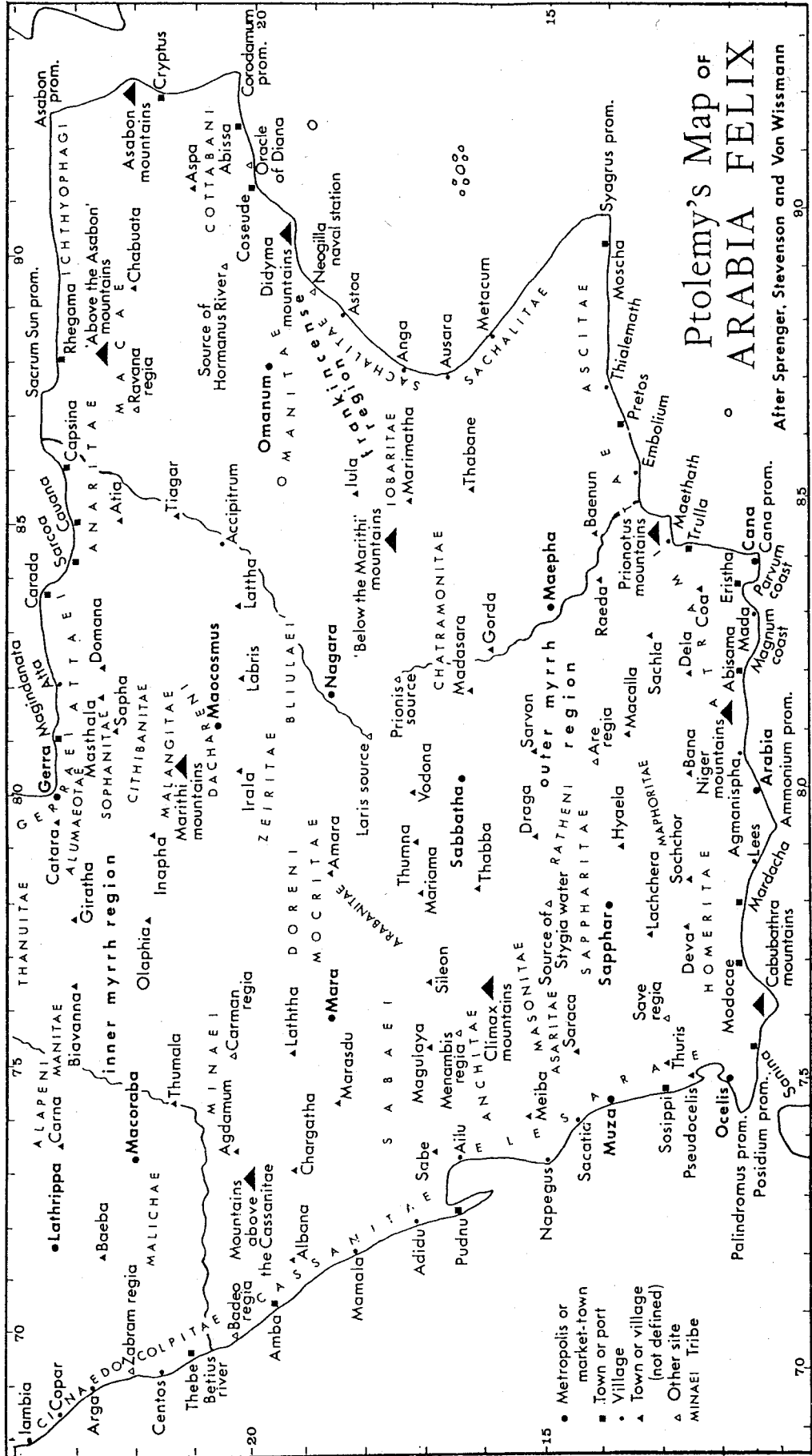
III.4. プトレマイオス『地理学』の記事

この書の成立が2世紀であることには異論がないが、より精確になると、世紀の半ばを挟む数十年の幅の中で諸説ある。数学者であり天文学者でもあつた著者のプトレマイオスの関心は、所与の地誌上の情報を、如何にすれば正確に図示できるかという点にあつた。一般に『地理学』と呼ばれる本書は、第1巻でそのための方法論が記された後、第2巻以降で地域別に、彼が作製した(と思われる)地図上に記載された地名が列挙され、それぞれの位置がプトレマイオス流の緯度と経度で示されている。彼が著作に際して最も依拠したのは、本書の中で自ら認めているとおり、テュロスの人マリノスの著書であつた。マリノスについては、本書の記事以上のことは知られていないが、一般には1世紀から2世紀にかけて研究・著作を行ったのであらうと考えられている。以下にプトレマイオスがマリノスを評している一文を『地理学』第1巻6章より引用する。翻訳は[織田/中務 1986]による。

第1節：テュロスの人マリノスこそ、この分野の学者の中で最も我々に近い人であり、刻苦精励してこの学問に身を捧げたように思われる。すなわち彼は、人も知る如く、それ以前から知られていたものにあきたらず多くの調査記録にあたり、ほとんどすべての先人の記録をつぶさに検討して、先輩たちの、あるいは彼自身の当初の誤れる信念があれば悉くこれに必要な修正を施したこと、彼自身の手になる『世界地図の改訂』が数版に及ぶことから見られるとおりである。

第2節：そして、彼の最後の『集成』に何ひとつ欠点が見られないのならば、我々も屋上屋を架すことなく、彼の本文のみに依って人間の住む世界の地図を作製すれば十分であつただらう。ところが彼にしてなお、信じがたいような馬鹿げた学説に与することもあるし、さらに地図作製の方法に関しては、使い易さと正しい比例への然るべき配慮を往々にして怠っていることも明らかであるので、我々が必要と認めた限り、彼の作品がより合理的で有益なものとなるよう我々なりの寄与をなそうという気になつたのも、蓋し当然であらう。

この文からも明らかのように、マリノスもそしてプトレマイオス自身も、自ら各地を回って情報を収集するという、いわばヘロドトス・タイプの学者ではなく、文献や伝聞を資料として研究を行う書斎派の学者であつた。しかもストラボンやプリニウスのように典拠を頻繁に挙げる、ということはしていない。したがってマリノスの参照した文献や、プトレマイオスがマリノスの説を補訂するのに用いた資料は未詳である。一般には、『地理学』の記事の内容は『エリュトラ海案内記』や『博物誌』のそれより新しく、1世紀末から2世紀前半にかけての情報を伝えていると解されているが、地域によってはアップデートな情報が入手できぬまま、ヘレニズム期の、それも初期の情報が改変を受けずに記載されているということもありうる。



地図3 プトレマイオスのアラビア地図 (出典:Groom 1986:74)

本稿の対象であるペルシア湾沿岸も、その可能性が高い地域の一つである。ギリシア=エジプト船がペルシア湾内で自由に活動できたとは思えないパルティア時代(エジプトはプトレマイオス朝~ローマ帝政期)には、沿岸の正確で細かい情報が入手できたはずがない。にもかかわらず『地理学』のこの方面の記事が詳しく、しかも僅かとはいえ同時代の事情を伝える『案内記』の記事と食い違っているのは、上で述べたようにヘレニズム期初期の情報に基づいているからではないか、と批判する者もある[Groom 1986:70-71]。それならプリニウスのこの方面の記事とは一致しているかということ、それとも食い違っているのが奇妙である。

ともあれ、南東アラビアにかかわる部分を引くとしよう。第6巻7章「幸福のアラビアの位置」では、まずアラビア半島の沿岸部の地名が、位置を示す経度・緯度とともに北西端のアカバ湾側から順に挙げられている。本稿に関連するのは第12節からである。なお、括弧内は訳者の補筆。

第12節：ペルシア湾の(ホルムズ)海峡に、

クリプトス港(隠れ港)	92° 40'	21° 30'
アサボーン連山と呼ばれる黒山、海ぎわのその中心部の経緯度	93°	22°
アサボーン岬(ラス・ムサンダム半島先端)	92° 30'	23° 20'

第13節：(既出後出の河川をまとめたもので、省略)

第14節：ペルシア湾。イクテュオファゴイ族(魚食い族)の湾が長く延び、その内側にマカイ族。

次にアナレイタイ族の、

レガマ町	88°	23° 10'
ヘリオス(太陽)の神聖岬	87° 20'	23° 30'
ラル川河口	86° 30'	23° 30'
この川の源流	81°	18°
カブシナ町	86°	23° 10'
カウアナ町	85°	23°

第15節：次に、アイガイオイ族の、

サルコエー町	84° 15'	23°
ユラダ町	83° 40'	23° 30'
アッタ村	82°	23° 15'

第20節以降には山脈と内陸に住む種族の名が挙げられていて、第24節には、オマーンのアフダル山地に当たるマレイタ連山の南側に、ゼエイリタイ族やブリウライオイ族とともにオマニタイ族の名が見える。さらにそれに続けて「それより東、アサボーン連山までにコッタバノイ族、その下に乳香産地。次に、サカリタイ族に接してイオーバリタイ族」と記されている。また第27節以降は内陸の町や村の表とも言うべきもので、第33節にラウアナ王都(87° 22')、第36節にはオマノン交易地(87° 40' 19° 45')の名が見える。なお、この第7章に列挙されている地名は、地図「アジアの6」の上に図示されている。テキスト同様、地図も現存するのは中世以降に作製されたかなりの数のコピーで、そのうち我々が通常写真で目にするものは、地名がラテン語で表記されている場合が多い。これらの地名の比定は、既に前世紀にシュプレングラーとグラザーの著書[Sprenger 1875; Glaser 1890]の中で詳しく行われているが、近年の考古学調査の成果を踏まえて新しい研究も現れている[Groom 1986, 1994; Potts 1990. II]。それらを参照しつつ、上に引いた地名の比定を試みてみたい。

クリプトス Kryptos港は、「隠れ港」という表現にぴったりのマスカットの入江に比定できる、というシュプレングラーの見解[Sprenger 1875:106]が定説となっている。アサボーン Asabôn 連山(『エリュ

トラー海案内記』第35節にも見える)がムサンダム半島を南北に走る山脈、特に Ru'ūs al-Jibāl と呼ばれる山塊を、またアサボーン岬が、訳者も記しているようにムサンダムの先端部を指していることもまず間違いない。この先端部を西側にやや回り込んだ所に、現在この地方の中心のハサブ Khasab という町があり、コスタはこれをアラビア語で「入江、湾」を意味する khawr+Asabon の縮約形ではないかと推測している[Costa 1991:57]。

因みに村川氏は『案内記』第35節の註釈において、アサボーンという地名がこの地方に住む Benī Assab 族の名に由来するという説を紹介している。氏はこの説の典拠を明らかにしていないが、同様の趣旨のことをポッツも記していて[Potts 1990. II :315]、それによれば、19世紀の前半にムサンダム半島を調査したウェルステッドが、ここでシフーフ Shihūh族の一派のアッサブ族を見出したとある。典拠として挙げられているのはウェルステッドの旅行記の一節[Wellsted 1838. I :239-242]であるが、直にこの書にあたった訳ではなくショッフの著書よりの孫引きである。おそらく村川氏が参照したのもこのショッフの書であろう。そこでまずウェルステッドの書を開くと、確かに上記の箇所にムサンダムのハサブ周辺の住民に関する記述はあるが、肝心の Benī Assab という族名はどこにも記されていない。ではショッフはどのようにこれを記しているのかと、次に彼の『案内記』の訳註書を開いてみると[Schoff 1912:148]、確かに第35節のアサボーンの項にポッツが記しているようなことが書いてあり、そこに問題の族名も登場する。ウェルステッドの記述を読んだうえでこちらを読むと、この族名が実はショッフの造語であることは明白なのだが、これだけを読むと、成程、ポッツや村川氏の誤解も無理はないという書き方である。とは言え、資料を孫引きで済ませた方の責任がそれで軽くなる訳では勿論ない。

第14節最初の、ムサンダム岬の先端をペルシア湾側に回ってすぐの所に長く伸びた、イクテュオファゴイ族の湾というのは、グルームの言うように[Groom 1994:203]、ハサブの沖合から東向きにフィヨルド状に深く湾入しているシャーム湾 Khawr al-Shâm(=Elphinstone Inlet)である可能性が高いが、現在もムサンダム半島のペルシア湾岸に見られるような、海岸に沿って断続的に長く伸びるクリークが、湾と誤認された可能性も捨て切れない。マカイ族は既に見たストラボン著『地誌』のマカイ族、プリニウス著『博物誌』のマカエ族と同じである。

その先に挙げられている地名のうち、レガマ Rhegama、カウアナ Kauana、サルコエー Sarkoê の三つの町(polis)は、現在の地名との類似という点では、それぞれ Ras al-Khaima、Umm al-Qaiwain、al-Shâriqa(=Sharja)に比定したくなる。最初の比定はシュプレングァー説で[Sprenger 1875:126]、ポッツは憶測に過ぎないと軽視しているが[Potts 1990. II :321]、筆者には他の二つと同程度の可能性はあるように思える。因みに、アラビア語文献に Ras al-Khaima という地名が初めて現れるのは、15世紀後半のイブン・マージドの航海書の中においてであるという[Wilkinson 1964:345; Ferrand 1921-1923: folio 139^r]。次のカウアナとサルコエーの比定はグルームの説である[Groom 1986:70; 1994:202]。彼はまたラル川を、ラス・アルハイマとウンム・アルカイワインの間に河口があったワーディー・ラムハ Wādī Lamḥa に比定している[1986:70; 1994:204]。サルコエーの次のコラダ Korada には、写本によって Karada、Kadara 等の異読があり、最後の読みを採る者はこれを現在のカタールに比定するので、サルコエー、カウアナ、それにラル川をもっと西の方に置いている(こちらが多数派)。しかしプトレマイオスの地図でコラダが置かれている所が、カタールのような半島状にはなっていないのを見ると、この解釈に従うのは躊躇される。ペルシア湾岸の他の地名・族名については、これといって魅力的な説がないのが現状である。

第33節のラウアナ王都 Rauana basileion は、オマーン内陸部の中心となるような町ということなので、シュプレングァーはアフダル山地の南北それぞれの側の中心都市ニズワとルスタクを候補として挙げている[Sprenger 1875:175]。それに対してグルームは、彼がウンム・アルカイワインに比定するカウアナ町

との位置関係を考慮し、ヘレニズム～ローマ期の大きな遺跡のあるムレイハの方が適当と考えている[Groom 1994:203]。後で記すように、ムレイハに王都があったらしく貨幣の鋳造も行われていたので、グルームの説は的を射ているかもしれない。

一方、第36節のオマノン交易地 *Omanon emporion* については、近年ゾファール地方の内陸部で発見されたシスル *al-Shisr* の遺跡がそれに当たるという説[Fiennes 1992:174-182]がある。この説によれば、これはまたアラブの伝承に名高い砂漠の都市ウバルの跡でもある。第24節の、乳香産地の近くにサカリタイ *Sakhalitai* 族に接してイオーバリタイ *Iôbaritai* 族が住むという記事が、ウバル説の根拠の一つとなっている。乳香産地はゾファール地方のことであり、『エリュトラ海案内記』第32節ではこの地方がサカリテースと呼ばれているので、サカリタイ族がその住民であることは間違いない。それに接して居住するイオーバリタイ族を仮にウバルの住民と解すれば、シスルの遺跡こそがこの町の廃墟の一部に違いないと推理する訳である。デフォルメされたプトレマイオスの地図では、確かにオマノン交易地はシスル辺りに位置しているように見える。しかしグルームはこの説に対しても反論する。シスルで発掘された遺跡が中規模の砦跡で、オマノン交易地のそれとしては貧弱に過ぎることや、オマニタイ *Omanitai* 族領の中心と思われるオマノン交易地の候補地としては、オマーン中のオマーンとも言うべき地域に位置し、かつ良港(この場合はマスカット)と通じているイズキーが最適(でなければニズワ)というのが、反対の主たる理由である[Groom 1994:206-211]。

プトレマイオスの伝えるオマノン交易地には、異常と言ってもよい点がいくつかある。まず、ここで「交易地」と訳されているギリシア語の *emporion* は、通常港湾の取引地を指し、本書でもアラビア半島で *emporion* と呼ばれているのは、ムーザ、オケーリス、アラビア(=アデン)、カネーの、いずれも臨海の4箇所のみである。たとえ海港と連絡があるとしても、内陸の取引地が *emporion* と呼ばれるのは異常である。また既に見たように、他の史料が揃ってオマナを臨海の港/商業地としているのに、『地理学』だけがこれを内陸に置いているのも奇妙と言わざるをえない。イズキー、ニズワ、ルスタクあたりがオマーンで、そこが「オマナ」もしくはそれに類する名で呼ばれていたことは大いにありうるが、諸種の史料から見て所在地はともかくその存在は確かな臨海の商業地に、プトレマイオスが言及していないのは何故か。類似の名で呼ばれる二つの土地が混同されたのであろうか。

III. 5. オマナとカラケーネー

この章の最後に、オマナとカラケーネー(メセーネー)の関係を巡るいくつかの問題を検討したい。両者の関係については、セレウコス朝時代にメセーネーの長官ヌメニウスが、おそらくインドへの交易路を確保するためにムサンダムに軍事遠征を敢行したことで、カラクスの人イシドロスがオマナ人の王ゴアイソスに言及していることを既に述べた。また『エリュトラ海案内記』の中では、カラクス近くのアポロゴスとオマナが、ペルシスの両商業地として並べて扱われていた。ここでは、両者の関係をより積極的に示すいくつかの史料を見ていく。

III. 5. 1. カラクス近くのオマナ人

プリニウスの『博物誌』第6巻32章145節に、「ペトラから先、カラケン *Characen* まで(の地)には、オマナ人 *Omani* が、サミラミス(伝説上のバビロニア女王)によって建設され、かつては有名であったアバエサミスとソラクティアの町に居住していたが、今では荒地地となっている。」と記されている。ポッツはこのオマナ人を、オマーン地方より移住してきた住民、それもアズド族と解し、オマーンのアズド族のイラク方面への移住は、既に1世紀には始まっていたと主張する[Potts 1990. II :325]。先にも述べ

たように彼は、イエメンからオマーンへ向けたアズド族の移住の開始を、前4世紀と非常に早い時期に想定しているので、その一部がさらに北へ移動して、1世紀にカラクスの西方に居てもおかしくないと考える訳である。

彼はこの説の傍証として、プトレマイオスの『地理学』第6巻7章19節に出てくる、ペルシア湾のアラビア岸の北端に位置するコロマニス町 Koromanis polis (79° 28' 45') を挙げる [Ibid.:224,325]。マイルズがこの地名を Khor (=Khawr) Omani、即ち "the creek of the Omani" に由来するとした解釈 [Miles 1878:160] を採用し、これも1~2世紀にカラクスの西方にオマナ人が進出していた証拠となりうると主張するのである。

しかしこの説にはいくつかの点で問題がある。まず第一に『博物誌』では、オマナ人の居住は過去のこととして記されているのを、何故かポッツは見逃している。彼はこの箇所をロエブ古典叢書の英訳から引いているが、そこでは間違いなく過去形が使われており、全く理解に苦しむところである。この時制を尊重する限り、1~2世紀にペルシア湾頭にオマーンからアズド族が進出していたという主張は、根底から崩れる。また、たとえアズド族の進出があったところで、果たして彼らはオマナ人と呼ばれたかどうか。さらには、アズド族の移住年代に関するポッツの説が一般には認められていないということも、ここで改めて述べておこう。

ポッツ説はさておいて、『博物誌』に記されているように、紀元前のある時期にメセーネーの西方にオマナ人が居住していて、そこがプリニウスの時代には廃墟となっていたということはあるだろうか。オマーンがインド洋とペルシア湾の間で重要な中継地であったことは、現在では異論なく認められてよいが、その地の住民が紀元前の時代にどの程度商人として活躍していたのかは、まだよく分かっていない。この時期にペルシア湾岸の中継商人として名声を博したのは、むしろ現在のサウディアラビアのハサー辺り (正確な位置未詳) にあったゲラ Gerra という都市の住民であった。

いまの話の文脈で想起すべきは、四半世紀前に発表されたロバンの研究 [Robin 1974] であろう。この中で著者は、前3世紀の末から1世紀余りの間に北東アラビアで鑄造・発行された貨幣の、銘文と出土地の分布状況を分析し、その結果をもとに、当時ペルシア湾岸の商業地からペトラへと砂漠越えの隊商路が通じていて、その沿道の部族間には、隊商活動の安全を目的とした一種の神聖同盟が結成されていたという仮説を立てた。同盟解体の理由としては、セレウコス帝国の崩壊とカラケーネー王国の独立によって引き起こされた交易ネットワークの変化を挙げている。

その後、ロバンが隊商路の最重要拠点としたハガルが、彼が考えたように北アラビアのオアシス都市ドゥーマ Dūmat al-Jandar を中心とする地域ではなく、ハサーのホーフ Hofūf 辺りとするヴィスマンの意見 [Wissmann 1975:35-43] の方が優勢になった。その一方で、貨幣の銘文に名前の現れる王のうち、ロバンが他の王と同じくハガルの支配者と見做していたアビーエール Abī'el を、ポッツはその後の新たな発見、特にムレイハで出土した貨幣の鑄型 [Boucharlat & Drieux 1991] をもとに、むしろムレイハを中心に南東アラビアを治めた、前2世紀の支配者に違いないと考えている [Potts 1994:82]。

このように、そのままの形では今では支持する者のないロバン説ではあるが、一部修正して、ペルシア湾岸からペトラへ通じる隊商路の沿道ではなく、オマーンからペルシア湾頭に至る海路沿いの商業地の間の同盟を想定すれば、なお有効な仮説と言えるのではなからうか。その場合には、現在のドゥールの地であって、おそらくオマナと呼ばれていた商業地の住民が、他の地の商人に伍して活躍し、メセーネー辺りまで進出して居留地を構えていたというのも、ありえない話ではない。ただ、それがプリニウスの時代には既に過去の話となっていた理由は、よく分からない。この後見るように、カラケーネー王国とオマナは深い関係を維持したようなので、オマナ人が多数カラケーネー国内に居ても当然と思える

のだが、ロバンが推理するように、メソポタミアの支配者がセレウコス朝からパルティアに替わり、その間の混乱に乗じてカラクスが独立した前後に、オマナ人の居留地も激変に襲われたのかもしれない。

Ⅲ.5.2. オマーン人の王メレダト Meredat

2世紀初めローマ皇帝トラヤヌスがメソポタミアに遠征した際、カラケーネーの王はこれに貢納を行い臣従した。そのためローマ軍が撤退した後、この国はパルティアの支配下に置かれ、王位にはパルティア王の一族の者が就いた。この世紀の第2四半期にその王位にあったのがメレダトである。そしてバスラ近辺で多数収集された彼の名を刻した貨幣のなかに、王号が「オマーン人の王 Basileus Oman [aiôn]」となっているもの(セレウコス暦454年=西暦142年の紀年あり)のあることが、注目に値する。この王については、ポッツが特に詳しく研究している[Potts 1988:143-156; 1990.Ⅱ:324-327; 1996:279-280]。彼はこの「オマーン人」を、ドゥール地の地にあったオマナの市民、もしくはより広くオマーン半島の住民の意に解しているが、その一方で、バビロニア南部に居たと彼が考えるオマナ人である可能性も示唆している[1990.Ⅱ:325]。しかしこの後の方の推測に根拠のないことは、いま上で述べたとおりである。

カラケーネーの政治的支配がペルシア湾の南部にまで及んでいたことの傍証として、ポッツはパルミユラの一碑文(西暦に換算して131年の紀年あり)を挙げる。これはパルミユラ・カラクス間の隊商交易で大いに活躍したヤルハイという名のパルミユラ人を顕彰したもので、そこに、この人物がスパシヌー・カラクスの王メレダトのために、現在のバフレイン島のサトラップを務めたと記されている。よってこの時期メレダトは、バフレインを支配下に置いていたことになる。上記の貨幣の銘文をもとに、その支配がさらにオマーンにまで及んでいたとポッツは考える訳である。『エリュトラ海案内記』の「ペルシス」をパルティアと解すなら、1世紀の中頃にはパルティアの影響力がオマーン半島の少なくとも海岸部全域に及んでいたことになるから、その後トラヤヌス帝の遠征で一時的な勢力後退があったとしても、2世紀前半にはカラケーネーを介して、再びオマーンを勢力圏に収めていたということは、十分考えられる。したがって筆者も、この問題についてはポッツ説に従いたい。

なお、文献史料ではないが、トラヤヌス帝の遠征に先立つ、1世紀から2世紀初頭にかけてのカラケーネーの王名を刻した貨幣が5点、他に王名不詳のものが1点、ドゥール遺跡で収集されていて、ポッツがこれもカラケーネー王国とオマナの関係の深さを証する資料として挙げている[Potts 1988:141-143]ことを付記しておく。

Ⅳ. おわりに

以上、主として2世紀のそれも前半までの文献史料によって、南東アラビアの状況を概観した。パルティアがペルシア湾で勢力を持っていた時代、プトレマイオスの『地理書』までは、たとえ括弧付きにせよ同時代史料と呼び得る古典語文献に、この方面についてもかなり詳しい記事が残されている。まさにその時期の商業地や都市の遺構と目されるドゥールやムレイハを始めとする遺跡の解釈に、これらの記事をどう生かすかが我々の課題である。

残念なことに、これ以降の時代になると、おそらく西方商人のインド洋海域における活動が低調になったことの結果であろうが、ギリシア・ラテン語文献の中にペルシア湾やオマーンに関する記事は、極めて稀にしか現れない。他の言語による同時代史料の記述も断片的である。それで、歴史的にまとまった情報を得られる史料となると、これはもう後世のアラビア語文献ということになってしまう。最初にも記したように、それらの文献の記事の整理は次稿において行いたい。

REFERENCES

Blau, O.

1868 "Die Wanderung der sabäischen Völkerstämme im 2. Jahrhundert n.Chr., nach arabischen Sagen und Ptolemäus", *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 22, 654-673 and 2 pl.

1871 "Altarabische Sprachstudien. 1.Theil", *Ibid.*, 25, 525-592.

1873 "Altarabische Sprachstudien. 2.Theil", *Ibid.*, 27, 295-363.

Boucharlat, R. & Drieux, M.

1991 "Appendix 1. A Note on Coins and a Coin Mold from Mleiha, Emirate of Sharjah, U.A.E.", in: Potts 1991:110-117.

Casson, L.

1989 *The Periplus Maris Erythraei*. Text with Introduction, Translation, and Commentary. Princeton.

Costa, P.

1991 *Musandam: Architecture and Material Culture of a Little Known Region of Oman*, London.

Ferrand, G.

1921-1923 *Le pilote des mers de l'Inde, de la Chine et de l'Indonésie*, par Šihâb ad-Dîn Aḥmad bin Mâjid dit «le lion de la mer». Le texte arabe. Reproduction phototypique du manuscrit 2292 de la Bibliothèque Nationale de Paris (= *Instructions nautiques et routiers arabes et portugais des XV^e et XVI^e siècles*. Tome I : Ibn Mâjid), Paris.

Fiennes, R.

1992 *Atlantis of the Sands. The Search for the Lost City of Ubar*, London.

Glaser, E.

1890 *Skizze der Geschichte und Geographie Arabiens*, 2.Band, Berlin.

Groom, N.

1986 "Eastern Arabia in Ptolemy's map", *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies*, 16, 65-75.

1994 "Oman and the Emirates in Ptolemy's map", *Arabian Archaeology and Epigraphy*, 5, 198-214.

1995 "The *Periplus*, Pliny and Arabia", *Ibid.*, 6, 180-195.

Kervran, M.

1984 "A la recherche de Suhâr: état de la question", R.Boucharlat & J.-F.Salles (eds), *Arabie orientale, Mésopotamie et Iran méridionale de l'Age du Fer au début de la période islamique*, Paris, 285-298.

1997 "Suhâr", *Encyclopaedia of Islam* (New Ed.), IX, Leiden, 774-776.

Kervran, M. & Hiebert, F.

1991 "Sohar préislamique. Note stratigraphique", K.Schippmann, A.Herling & J.-F.Salles (eds), *Golf-Archäologie*, Buch am Erlbach, 337-348.

Landsberger, B.

1924 "Über die Völker Vorderasiens im dritten Jahrtausend", *Zeitschrift für Assyriologie*, 35, 213-238.

Levi Della Vidda, G.

1991 "Mâzin", *Encyclopaedia of Islam* (New Ed.), VI, Leiden, 953-954.

MacAdam, H.I.

1989 "Strabo, Pliny the Elder and Ptolemy of Alexandria: Three Views of Ancient Arabia and its Peoples", T.Fahd (ed.), *L'Arabie préislamique et son environnement historique et culturel. Actes du Colloque de Strasbourg 24-27 juin 1987*, Leiden, 289-320.

Miles, S.B.

1877 "On the Route between Soḥâr and el-Bereymi in 'Omân, with a note on the Zatt, or gipsies in Arabia", *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, 46, 41-60 and a map.

1878 "Note on Pliny's Geography of the East Coast of Arabia", *Journal of the Royal Asiatic Society*, N.S.10, 157-172.

1919 *The Countries and Tribes of the Persian Gulf*, 2 vols, London.

Potts, D.T.

1985 "From Qadê to Mazûn: Four notes on Oman, c.700 BC to 700 AD", *Journal of Oman Studies*, 8, 81-95.

1988 "Arabia and the Kingdom of Characene", D.T.Potts (ed), *Araby the Blest. Studies in Arabian Archaeology*, Copenhagen, 137-167.

1990 *The Arabian Gulf in Antiquity*. Vol. I : *From Prehistory to the Fall of the Achaemenid Empire*. Vol. II : *From Alexander the Great to the Coming of Islam*. Oxford.

1991 *The Pre-Islamic Coinage of Eastern Arabia*, Copenhagen.

1994 *Supplement to The Pre-Islamic Coinage of Eastern Arabia*, Copenhagen

- 1996 "The Parthian Presence in the Arabian Gulf", J.Reade (ed.), *The Indian Ocean in Antiquity*, London and New York, 269-285.
- Robin, Ch.
1974 "Monnaies provenant de l'Arabie du Nord-Est", *Semitica*, 24, 83-125 and pl. I .
- Ross, E.C.
1874 "Annals of `Omán from early times to the year 1728 A.D. From an Arabic MS by Sheykh Sirhán b. Sa`id b. Sirhán b. Muhammad, of the Benú `Alí tribe of `Omán", translated and annotated, *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, 43, 111-196.
- Salles, J.-F.
1995 "The *Periplus of the Erythraean Sea* and the Arab-Persian Gulf", M.-F.Boussac & J.-F.Salles (eds.), *Athens, Aden, Arikamedu: Essays on the interrelations between India, Arabia and the Eastern Mediterranean*, New Delhi, 115-146.
- Schoff, W.H.
1912 *The Periplus of the Erythraean Sea*, translated from the Greek and annotated. New York.
1914 *Parthian Stations by Isidore of Charax*. The Greek Text with a Translation and Commentary. London.
- Sprenger, A.
1875 *Die alte Geographie Arabiens*, Bern.
- Thompson, R.C. & Mallowan, M.E.L.
1933 "The British Museum Excavations at Nineveh, 1931-32", *Annals of Archaeology and Anthropology*, 20, 71-186.
- Wellsted, J.R.
1838 *Travels in Arabia*, 2 vols., London.
- Wilkinson, J.C.
1964 "A Sketch of the Historical Geography of the Trucial Oman down to the Beginning of the Sixteenth Century", *Geographical Journal*, 130, 337-349.
1972 "The Origins of the Omani State", D.Hopwood (ed.), *The Arabian Peninsula: Society and Politics*, London, 67-88.
1973 "Arab-Persian Land Relationships in Late Sasánid Oman", *Proceedings of the Seminar for Arabian Studies*, 3, 40-51.
1975 "The Julanda of Oman", *Journal of Oman Studies*, 1, 97-108.
1983 "The Origins of the *Aflâj* of Oman", *Ibid.*, 6, 177-194.
- Wissmann, H.von
1958 "Die Südgrenze der Terra Cognita von Juba und Plinius bis Ptolemäus", *Geographische Forschungen. Festschrift zum 60. Geburtstag von Hans Kinzl*, Innsbruck, 311-325.
1975 *Über die frühe Geschichte Arabiens und das Entstehen des Sabäerreiche* (= Sammlung Eduard Glaser, 13), Wien.
- Zadok, R.
1981 "Arabians in Mesopotamia during the Late-Assyrian, Chaldean, Achaemenian and Hellenistic Periods Chiefly According to the Cuneiform Sources", *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 131, 42-84.
- 大牟田章(訳註)
1996 『フラウイオス・アッリアノス アレクサンドロス東征記およびインド誌』全2巻(本文篇・註釈篇), 東海大学出版会.
- 織田武雄(監修)／中務哲郎(訳)
1986 『ブトレマイオス地理学』, 東海大学出版会.
- 薮勇造
1997 「新訳『エリュトラ海案内記』」, 『東洋文化研究所紀要』(東京大学), 132, 1-30頁.
- 村川堅太郎(訳註)
1946 『エリュトラ海案内記』, 生活社.